

写真: ヤマモモ(千代田区永田町)



目次

果樹農業の動向

- ・中国のサクランボは成長産業 1

- ・課題に立ち向かう米国サクランボ産業、ベテラン農家の激励とアドバイス 2

- ・コロナ後の中国果物市場を救うのは? 4

- ・イタリアの果樹栽培機械化 5

現地報告

- フランス 6

- タイ 7

トピックス

- ・台湾、イタリア産リンゴの輸入解禁 7

- ・フロリダ州、フィンガーライムの可能性 7

- ・ロックダウンで子供の果物、野菜摂取量減少 8

- ・世界の食市場に対するコロナウイルスの影響 8

果物を食べて
応援しよう!

被災地を応援



国際植物防疫年
2020

中央果実協会は国際植物防疫年2020のオフィシャルサポーターです。

果樹農業の動向

中国のサクランボは成長産業

Good Fruit Grower 誌(2020年5月号)

貿易問題はさておき、中国はサクランボに夢中で、プレミアム価格を再定義しなければならないような値段で輸入している。その値段は米国産にも、チリ産にも当てはまる。

しかし、中国は自らサクランボの栽培を始め、高品質果実の大量生産のため最新の技術・品種、最近の台木に大規模投資を行っている。

「私としては、貿易戦争以上に中国の国内生産が進み米国産に取って代わることを懸念している」(2019年9月に上海交通大学に客員教授として滞したワシントン州立大学のWhiting氏)。中国は米国北西部地域サクランボの最大輸出先で、2017年には300万箱を出荷した。昨年は、2年間にわたる中国とトランプ政権の貿易摩擦の結果、出荷量は170万箱に低下した。

中国のサクランボ生産量

Whiting氏は、中国のサクランボ生産量は、多くの推定値よりずっと多いのではと感じている。公的な統計は相当なバラツキがある。しかし、米国農務省海外農業局の推定では、2019年の生産量は42万トンで、これは20ポンド箱で3,750万箱に相当する。そこには、酸果種も含まれるが、市場関係者は多くは甘果種だと考えている。

Whiting氏によると、むしろ80万トンに近く、これでも、おそらく控えめな数値だという。この根拠は、中国の多くの研究者、生産管理者、生産者、地方政府担当者から聞いた面積と単収予測からである。80万

トンとすれば、中国はトルコに次いで世界第2位の生産国となり米国を上回る。実際の生産量のいかに関わらず、中国のサクランボ生産は、より洗練され、大規模化が進んでいる。

機械化

中国の農業を見ると大部分が、小規模圃場で生産性が低く、加工、選果、流通ネットワークも地方に分散し、信頼性も低い。サクランボ栽培は黄河流域の北部地域で行われている。それが、急速な変化を見せている。

視察旅行で、Whiting氏は、最新樹形システムの整然と管理された広大な新規サクランボ園を目の当たりにした。栽培管理者は、成長調整剤、環状剥皮、夏季せん定、トレリスを利用している。「要するに、技術改良がどんどん進んでいる。間違いなく米国北西部のサクランボと競争するようになる」

ワシントン州ヤキマで1月に開かれたアウトウ年次大会で、Whiting氏は、世界最大のリンゴジュース生産企業であるHaisheng Co.によって4



米国や欧州のサクランボ園のように最新技術でよく管理されたRegina種の園(陝西省西安市)

年前に植えられた300エーカーの Regina 種の果樹園の写真を紹介した。きれいな壁面樹形のトレリス仕立てで、きちんとせん定されている。「ワシントン州のどの果樹園と比べても遜色なく管理されている」

さらに南部地域では、企業が所有する各種の施設栽培、被覆栽培のサクランボ園がある。これらは、雨を防ぐとともに4、5月出荷を目的とした栽培である。この時期は、チリの輸入サクランボの後で、カリフォルニア産の前に当たる。

ここでの課題は、休眠打破のための低温不足と双子果だという。しかし、中国は、南部地域でも適する品種、台木を見いだす育種計画をすでに進めている。

湿度や夏季降雨にもよく適応することができれば、上海のような巨大都市にもサクランボを提供しやすい。上海の消費者はサクランボが大好きだ。そこでは、被覆栽培のもぎ取り園の価格は、1ポンド12ドルだ。その標準的な収量は、1エーカー2〜3トンで、時に収量が二桁にもなるワシントン州とは比較にならないほど低い。しかし、収量が低くても、あの価格なら十分にペイするという。「生産さえできれば、仮に収量1トンとしても、利益は途方もない。それは理にかなっている」。中国は、Tieton 種のサクランボを栽培している。これは、ワシントン州立大学で育成された品種だ。
市場の見通し

米国北西部サクランボ生産組合の国際マーケティング部長の Hu 氏も、中国視察でさらに大規模で最新技術の果樹園を見ている。時には、米国産サクランボは、中国北東部の都市の小売店で販売スペースを中国産と競合しなければならない状況だ。

しかし全体としては、Hu 氏によれば、中国の園芸技術、選果、コールドチェーン、配送網は米国より約10年遅れている。中国南部では収穫時期が4、5月であり、その地域のサクランボ産業が成長していくと、収穫ピークが6月下旬の米国北西部よりカリフォルニアと直接競合することになりそうだ。

スケールメリットを求める中国のサクランボ生産企業にとって、土地の所有政策が最大の障害だ。ほとんどの農地は国有で、しかも小規模生産者によって耕作されているので、最新技術を導入できる生産者が限られる。「もし、土地所有政策を変更しなければ、米国とは競争にならないと思う」(Hu 氏)。

視察中にこのことについて質問した Whiting 氏は、土地所有は障害だが、打ち破れない壁ではないという。政府関係者によると、土地を明け渡す見返りにその農民を雇用することで大規模投資ができるように私企業と連携する用意がある。「中国政府は、この取引を進める意向だ」(Whiting 氏)。

Ross Courtney 2020,5/26

課題に立ち向かう米国サクランボ産業、ベテラン農家の激励とアドバイス Good Fruit Grower 誌(2020年5月号)

人件費の上昇、貿易問題、X 病。サクランボ栽培は大変だ。こうした混乱状態にある産業に、今年はさらに、新型コロナウイルスの影響で、生産者はすべての作業を1.8m離れて行うことになった。

不確実になれているのは誰かと思ったら、それはサクランボ生産者だ。以前にも厳しい時期を過ごした経験豊かな生産者は、現在の苦境も乗り越えられると、楽観的に見ている。

サクランボには課題が多い

「毎日、毎年、毎シーズン、立ち直る強さが必要だ」(ワシントン州ウェナッチェの果樹栽培者 Mrachek 氏)。Mrachek 氏は、今年の春にサクランボ産業の直面する課題と解決策について Good Fruit Grower 誌と懇談したベテラン果樹生産者の一人だ。そこで出された解決策は、技術、回復力、戦略だ。その中からいくつかのテーマを紹介する。

機械化

人件費は、上がり続けている。そこで新しい道具が必要だ。刈り込み、すなわちヘッジングがその一つだ。しかし、Mrachek 氏は機械収穫の研究こそ復活すべきだという。ワシントン州立大学は、過去には振動収穫システムに取り組んでいたことがある。

ワシントン州ワパトの生産者で長く州の果樹研究委

員会の委員長を務めた Doornink 氏も同じ意見だ。サクランボの機械収穫は、同委員会の研究ロードマップの課題に約20年間なっていた。我々は、ずっと資金を提供していたが、機械収穫に継続して取り組むことはなかった。

H-2A は浸透している

Mrachek 氏によると、機械収穫にブレークスルーがあるまでは、H-2A 労働者が、収穫労働の主体であり続けるという(H-2A は、農業者用の短期労働ビザ)。それが、今ある唯一の選択肢だ。

サクランボ産業では、以前も労働力確保の問題があった。Mrachek 氏には、農場での家族用の労働キャンプの楽しい思い出がある。そこでは、生産者が遊び場を作り子供たちにバレーボール大会のような活動を、毎年行った。それは、投資としては厳しいものがあつたが、サクランボ産業にとってはかえってよかったという。

オレゴン州ダレスの Orchard View 社の営業責任者の Omeg 氏によると、H-2A プログラムは、経費がかかり、不十分だという。しかし、代わりがない。「最も経費がかかる労働力は、必要であるが手に入らない労働力だ」(Omeg 氏)。

彼の会社では、H-2A 労働者を利用して数年しか経っていないが、今後も継続する計画だ。機械化

は、数十年間、労働力の削減につながっていない。そのため、H-2A 労働者を安定的に雇用して、果樹園管理とその他業務を動かしていく必要がある。

品種の多様化はよい

ワシントン州ジラの果樹園の三代目 Jones 氏は、以前は、サクランボの Bings 種を収穫するのに、250人以上の労働者で約10日必要だったと記憶している。近頃は、彼の農園では10品種あり収穫時期は4週間にわたる。収穫労働者は最盛期で100人だ。

サクランボ産業界では、より多くの品種を栽培していくことになるだろう。それは、育種家が市場の要望にあった大果で、日持ちのする品種を探し続けているからだ。Grandview 社の Olmstead 氏は、転向者の一人だ。かつては、品種更新への投資に躊躇していた。買い物客は品種に関心がなかった。それなのになぜ更新をするのか。「新品種は、うまくいっているようだ」(Olmstead 氏)。

Doornink 氏は、20年もすれば、サクランボ産業界は、うどん粉病抵抗性で、リンゴで言えばハニークリブのような品種を手に入れられると信じている。そのような果実であれば、消費者は殺到するだろう。それは時間の問題だ。抵抗性遺伝子があり、育種家は正しい組み合わせを見つけるだけだ。しかし、刺激的な品種を見つけ出しても、生産者、流通業者は、早い段階では、大きな期待を抱かせるような衝動をおさえなければならない。

X 病は対処可能だ

X 病は、総称でリトルチェリー病 (little cherry disease) と呼ばれることも多い。病原体はファイトプラズマで、新しいものではない。ブリティッシュコロンビア州、カリフォルニア州とともにワシントン州でも、過去に大発生に見舞われ、そこから回復した。「我々は、近隣州の状況をもとに対処法を学ばなければならない」(Doornink 氏)。

対策の方針は、ずっと変わっていない。感染樹を取り除き、媒介する病原体をコントロールする。Jones 氏は、祖父も彼に同じアドバイスしていたと記憶している。そのアドバイスは、1950年代にもさかのぼる。彼は、感染した区画全部を除去してきた。「仮に少しでも感染樹があるとしたら、周囲の樹を守るため、一緒に扱ってはならない」

Mrachek 氏は、生産者に対して、X 病について銀行等と正直に相談するよう勧めている。感染区画の除去には、緊急的な資金が必要だ。

Mrachek 氏は、Eurofins Cascade Analytical 社の営業開発課長でもある。同社はヤキマとウェナッチェに研究室があり、6月にはX病菌のスクリーニング事業の商用化の準備を進めている。それは検査能力の拡大により感染樹除去の迅速化に役立つ。生産者こそが、病虫害に対処できる。市場でも、政治家でもない。

貿易問題は一時的

調整により、貿易と市場の問題は打開できる。サクランボ産業界は、そうしたことを行ってきた。Olmstead 氏がこの業界に入ったのは1970年代だが、その当時の生産量は、現在に比べればほんのわずかだった。取扱量が増えても、販売業者は、そのための販売スペースを見いだしている。それは、驚異のコミュニケーションとでも呼べるもので、すべてをタイムリーに行う必要があり、それは複雑な作業だという。

アジア向け輸出市場は、生産者に対してカンフル剤にもなった。当初、Doornink 氏は信用していなかった。傷みややすいサクランボを発展途上国に輸送することは、想像もできなかった。しかし、サクランボが港に無事に到着したのを確認して、うれしい驚きだった。「こうした海外市場では、時には、サクランボをピザのように扱う。サクランボが賞賛されるのを見るのはほんとに楽しい」

各種団体への関与

長きにわたりジラ校区の役員である Jones 氏は、昔に比べボランティア活動をしなない人が多いことを残念に感じている。ライオンズクラブでも、産業界でもそうだ。彼は、ワシントン州果樹研究委員会の小委員会メンバーであり、1月にヤキマで開催されるサクランボ年次大会の委員でもある。「年次大会は勉強するのに素晴らしい機会だといつも考えている」

Olmstead 氏も同意見だ。彼も、33歳から長期間ワシントン州果樹委員会で活動している。同委員会は、米国北西部サクランボ生産者団体を運営している。彼自身、その役職にあることを幸運だと思っている。「サクランボ産業界全般について、生産者よりずっと幅広い視点をもたらしてくれた」。Mrachek 氏、Omeg 氏、Doornink 氏は、皆、サクランボ関連産業界での長い経歴がある。

ビジネスとして

Orchard View の Omeg 氏は、新品種開発、革新的な栽培システムと効率化の推進に協力している。しかし、農場経営を成功させるには、収益が第一だ。サクランボ産業界にとって第一に最も必要なことは、経営が健全となるようにデータに基づく戦略を立案することだと信じている。「それは面白いことではないし、我々農家の多くが楽しむものでもない」

Omeg 氏は、経験からそのようなある決断を下した。2018年、熟慮の末、五代目の生産者として、近隣農場との合併を行い、垂直統合された Orchard View 社を設立した。これにより、Omeg 家はサクランボ事業の継続が確かなものになった。Omeg 氏は、成功かどうかは面積当たりの収益で判断する。彼は、Regina 種の果実の大きさと商品化率は、Sweethearts 種の収量の多さにくらべメリットが不十分として、Regina 種の樹を取り除いた。父親は、高品質果実に誇りを持ち、それで成功かどうか判断しているため、がく然とした。

他にも、エーカー当たり2トンを生産する10年生の Benton 種が、隣の単収5トン生産する20年生の Bing

種より収益が少ないとして、Benton 種の園の樹を抜いた。すべては、バランスシートによる。「そこには感

情の入る余地はない」

Ross Courtney, TJ Mullinax 2020,5/21

コロナ後の中国果物市場を救うのは？

Produce report 電子版(2020年6月3日)

中国当局の数か月にわたる断固たる措置により、中国での新型コロナウイルスの流行はようやく抑えられてきた。農業生産は、程度の差はあるが通常レベルに戻りつつあるが、全般的な需要回復までには時間がかかる。昨年末から、中国の果物市場は、需要が急減したまま4か月を経過した。果物の輸入流通業者は、数年間の黄金時代から、突然予想もしない激震に見舞われた。

過去10年間、中国の果物輸入量は6倍に増え、2009年の16.3億ドルから2019年の103億ドルになった。2019年には23.2%増加し、今や果物の純輸入国だ。サクランボとアボカドは、特に、中国の台頭する中流階級のお気に入りだ。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大による景気減速が、この急成長に停止ボタンを押した。

昨年、中国における輸入果物の最大流通拠点である広州市の江南青果物卸売市場は、一日に60～80の輸送コンテナを処理していた。しかし、現在は新型コロナウイルスの影響で、約15の輸送コンテナを処理している状況で、価格も半分にまで低下した。例えばエジプト産オレンジは、今年のこの時期15kg100元(14ドル)であったものが、70元に低下している。

流通業者によれば、エジプト産のオレンジは特に果汁が多く、甘く、風味豊で、主として、ホテル、バー、レストラン等に販売されている。国内の外食産業は、徐々に通常に戻りつつあるが、食品材料の購入という点では期待がもてる状況にない。

ネットショッピングの人気商品であるニュージーランド産リンゴの価格は、今年の1、2月には1kg15元(2.1ドル)であったが、今年の同時期には24元にまで上昇した。しかし、4月に入って、輸入価格は平年並みに下がったが、卸売段階では約12元で売られることになり、輸入業者、卸売り業者を大いに嘆かせた。

ブドウも、価格が下落し販売量も少ない輸入果物の一つだ。感染拡大前は、卸売価格は平均で1kg22.5元(3.15ドル)だった。しかし、今は南半球の成熟期で、出荷が始まり、輸入価格は1kg17～18元にまで下落した。流通業者にブドウが届き、10～12.5元に値下げしても、販売はそれほどでもなかった。

国家統計局が4月に公表した2020年第一四半期のGDPは、昨年比で6.8%減少した。これは1992年以来始めて、中国経済が四半期ベースで減速したことを示している。消費者は、消費を減らしている中で、輸入果物は、ますます必需品でなくなっている。

旺盛な購買力を持つ消費者も存在する。しかし、常に最新の流行商品に手を伸ばす若者も、突然の収入

不安、生活する上でのプレッシャーに直面して、消費習慣に影響が出ている。輸入果物の主要購入層である若者は、彼らが望むどんな果物でも自由に購入するようになってきたが、今では彼らの財布はそれほど自由ではなくなった。

輸入業者は困難に直面し、消費者は消費行動を変化させている一方、国内農家はどんな状況だろうか？農家も、感染拡大の中で大きな損害を被っていることが明らかになってきた。農道の閉鎖により、農家はほとんど生産できない状態だった。

栽培管理の上でも、労働力の不足と管理の遅れで、最終的には果物の品質と生産量に大きな打撃を受けた。一方、農家は、厳しい輸送制限の結果、資材が入らず果物の出荷もできないという二重の問題に直面した。市場サイドでも、流通業者は販売できず、注文量も低迷したことから、農家収入にも直接影響した。

さらに状況を悪くしているのが、中国の一部地域で、異常気象に見舞われたことだ。4月には、地域によっては冬のように寒い天気が長期間続いた。

モモの主要産地である湖北省では、果実肥大の時期に大雪と雹に、成熟期には干ばつにも見舞われた。これにより昨年に比べて出荷が10日遅くなった。市場供給量は少なめで、販売も弾みを付けるにはあまりにも低調だ。

北部地域のサクランボも、好調とはいえない。3月が温暖で、河北省のサクランボは開花が早く、4月の低温により大幅な減収となった。

コロナに対してリスクの低い経済活動は徐々に再開され、果物市場は、いくらか希望が出てきた。農家と流通業者は生き残りをかけて、低価格競争に入っている。しかし、これも農家の損失を軽減することはなさそうだ。

中国農業農村部の公表資料によれば、調査した国産果物5品目の卸売価格は、昨年比で11.7%減少した。農家をもっと悩ませているのは、相当の価格低下にもかかわらず、消費者需要が停滞していることだ。

感染拡大のピーク時に、果物販売の代替品は非常に限られていた。このため、多くの果物販売店は、地域レベルのネットショッピングやライブ配信を通じた販売促進を行った。地域レベルのネットショッピングは、人との接触なしで農産物が届く。消費者は、新鮮で安全な農産物を手頃な値段で楽しむことができる。速達サービスは、早い時期に再開した。大規模なネットショッピングも、‘農家へ愛を示そう’とのスローガンのもと動き出した。地方政府のトップも、ライブ配信による販売活動に参加している。

こうした新しい販売方法は、傷みやすい果物のロス

を減らし、農家の損失を減らすのに役立った。しかし、大多数の農家はインターネットの利用経験がない。それが直接、または間接利用としても、そうした方法に慣れるまでに時間がかかる。

さらに、果物のネットショッピングは、コールドチェーンに大きく依存する。国中で高品質果物を販売するには、廃棄率を十分に下げる必要がある。また、ネット販売を利用する消費者の鮮度に対する要望を満

足させる必要がある。しかし、中国のコールドチェーンの現状では、こうしたことは困難だ。

夏が近づき、市場に果物が並ぶ最盛期を迎えるが、この不景気はどのくらい続くだろうか？経済が安定し、人々の生活が通常に戻り始めている。こうした中、農家や流通業者がトンネルの先に明かりを見ることができるようになるのはいつだろうか。

Benjamin Henry 2020,6/3

イタリアの果樹栽培機械化

Good Fruit Grower 誌(2020年4月)

労働力、エネルギー、輸送等のコスト上昇により、イタリアの果樹生産者は、果樹園の効率化と精密化を追求しながら、可能な限り機械化しようとしている。

「生食用の高品質果実でも機械化はますます重要になってきている」(イタリアボローニャ大学のCorelli-Grappadelli氏)。「我々は、機械化できないような果樹園の形式からは撤退している」。Corelli-Grappadelli氏は、2月に米国ミシガン州で行われた第63回国際果樹協会年次大会の開幕講演で、イタリアの果樹園設計と管理の最新トレンドについて発表した。

イタリアの生産者は、これまで最新技術と果樹園設計について実験的な取組を行ってきた。その革新技術は、2014年の国際果樹協会の見学ツアーの中心であったし、2020年11月開催予定の大会でも中心になる予定だ。生産者は、最新の高密植栽培を好んで、旧式の低密植栽培の樹を抜いた。今や、生産者は、3次元的な樹形を段階的にやめて、幅を狭くして樹形の単純化を進めている。

「樹形は、単純に、さらに単純に、もっともっと単純になっている」(Corelli-Grappadelli氏)。イタリアの精密果樹園管理に利用されている有望な技術として、ドローンや高所作業台車等を紹介した。生産者は、センサが装備され簡易な作業が行える機械を求めている。高所作業台車は、特に人気があり、新型のものはバッテリー駆動だ。防雹ネットは標準装備で、虫害や日焼け等の防止のため、今では2倍に増えている。

イタリアの生産者は、機械せん定を長きにわたって避けてきた。せん定後の樹形が好きになれなかったからだ。しかし、近年、核果類生産者は、コストとともにせん定に対する考え方の変化から機械せん定に関心が向いてきている。

整枝せん定も、樹勢調整、高品質多収を考えた新しいルールが導入され変化している。生産者は、できるだけ切る回数を少なく整枝せん定したい。最初の3年間は、着果するまで、リンゴ樹を触りたくない。

最近、新たに出てきたのは、果樹園の光透過をよくするために葉を機械的に除くツールだ。イタリアの生産者、特に農業の中心地帯であるポー平原のモモ生産者は、Darwin式摘花機も利用している。さらに技術革新が進んでいる。ある農家はジュース用のア

ズを収穫するのに、ブドウ収穫機を採用したという。

リンゴは、イタリアの主要果樹で、続いてモモ、セイヨウナシだ。モモは、しばらく極端に低い市場価格であったが、再びもうかるようになってきた。アンズ、スモモの価格は上昇し、クルミやヘーゼルナッツも人気だ。

イタリアの生産者は、新規市場を見越して早生の新品種の植え付けを増やしている。国際市場、特にロシア市場を数年前に失ったことは、大きな課題となった。イタリアのリンゴ、セイヨウナシ、核果類産業は、いまだにその損失を痛感している。リンゴは、ポーランド産と他の海外市場向けで競争し、セイヨウナシはオランダ、ベルギー産と競争している。

EUの食品安全環境政策は厳格だ。イタリアの生産者にとって、年ごとに利用できる防除用の農薬が減っている。同時に、新しくより防除が難しいクサギカメムシのような害虫が、果樹に大きな損害を与えている。しかし、農家はそれを防除するのに限られた手段しかない。クサギカメムシの場合、農家は天敵蜂を放すことにより被害を軽減することができるようになった。

病害については、イタリアではセイヨウナシの衰弱病(pear decline)が、ずっと最大の問題だ。植え替えの際の連作障害もよく見られる。生産者は、高頻度で果樹園を新しくし、何度も同一品種を植える傾向にある。Corelli-Grappadelli氏は、そうした傾向が変わるように望んでいる。現在見られる連作障害の解決には、抵抗性台木の利用、土壌の入れ替え(リンゴでは植える列の部分、モモでは全体)がある。

これらの革新技術の多くは、園地整備から設計までを含めて、11月の国際果樹協会で紹介されることになる。ツアーの訪問地は、フェラーラ、ヴィチェンツァ、トレントだ。

Matt Milkovich
2020,4/23



リンゴの機械せん定

●●● 現地報告

コロナで露呈、外国人季節労働者に依存するフランスの果樹産業

フランス現地情報調査員 Jean-Louis RALLU

新型コロナウイルスの感染予防策として国境が閉鎖され、外国人の季節労働者がフランスに入国できなくなった。

人手不足を訴える農業団体の要請があり、仏農相は自宅待機している国内の非農業部門の労働者に農業を手助けするように呼びかけた(4月号参照)。5月始めまでに33万人を超える応募があり、身元確認の上で正式に登録された人は28万4千人にのぼった。閉鎖された飲食店や商店に勤める人、理容・美容師、その他のサービス業、事務職などの労働者が応募した。

ところが、農家が実際に申請した求人は6千件にとどまった。応募者の50分の1である。農家は素人を警戒したようだ。また、外出禁止令がいつ解除になるかも分からず、慣れてきた頃に去っていくかもしれない人を雇う気にならなかったのかもしれない(実際、5月11日に外出禁止令は解除された)。

双方が合意に至ったのは約3,000件で、実際に採用されたのは1,400人に過ぎなかった。仮契約はしたものの、実際に農場に顔を出さない人がかなりいた。また、働き始めても長続きする人は少なかった。突然の外出禁止令に戸惑い、ただただ外に出たいという理由で応募した人が圧倒的に多かったようだ。それに体力が続かない。早朝から来るのを嫌がったり、コーヒブレイクや喫煙休みなどを頻繁に求める人たちに農業経営者が呆れることもあったようだ。まじめに働く人の場合でも、例年働く外国人労働者ほどの仕事量はこなせない。

4月は果樹部門では摘果が行われた。摘果はそれほど技術を必要としないが、5月以降のサクランボ、メロン、アンズなどの収穫となると果実を手を持って、そのサイズや熟れ具合を判断しなければならないので、果樹農業者は不安に駆られたようだ。実際、4月の農業生産の10%が人手不足で収穫されなかった。

6月、7月に、順調に人手が集まらなければ、特に大型の果樹園で、今後、生産放棄がみられるかもしれないといわれている。

5月7日、仏政府はEUの他の加盟国の季節労働者の特別入国を認めると発表した。国内最大の農業経営者団体FNSEAが強く要請したようだ。5月の農作業に8万7千人の外国人季節労働者が必要だとし、特に技術や経験のある人を期待している。この措置は、フランスの農場とすでに労働契約を結んだ労働者の入国を許可するものである。

この措置の実施に当たり、政府はFNSEAに対して、季節労働者に関する衛生規定書を作成するように求めた。感染が起これないように作業の手順などを定めた規定書と、外国人労働者の住居の衛生条件を記したものの2種類が作成された。

FNSEAは、当初、原則として物と人の自由な動きが保証されているシェンゲン協定域内だけでも良いから季節労働者の入国を許可するように要望していたが、政府は最終的にシェンゲン協定に加盟していないルーマニアやブルガリアからの入国も許可した。シェンゲン協定に限定すると、応募するのはせいぜいポーランド人で、人数が集まりそうにないからかもしれない。

季節労働者の報酬は、週30時間から40時間の労働で、1,000~2,000ユーロ(12万~24万円相当)の収入になる。ポーランド人の季節労働者はフランスで働くと同国で同じ仕事をする場合の3倍の収入になると語っている。ルーマニア人やブルガリア人の場合、その格差はもっと大きい。

ルーマニア人はすでに4月に8万人がドイツへの特別入国を許可されている。スペインは、青果物生産ではフランスと競合しているが、フランスに来る季節労働者も少なくない。しかしスペインが独自に7月1日までの国境閉鎖措置を決めているので、季節労働者もまだフランスに入国できない(その後、6月21日開放に変更)。

また例年、スペインの人材派遣会社を通してエクアドルやボリビアなどの南米の労働者もフランスで働いていた。忍耐強く、よく働くと言われる南米労働者もまだまだ入国できそうにない。

人材派遣会社は、フランスの農業経営者にとって、何日から何日まで何人必要だといえ、人材の輸送から、煩雑な役所の手続きなどを一切引き受けてくれるので、経費は多少高くても、重宝がられている。2010年ごろからこの形態が伸びていて、最近では東欧の労働者も派遣会社から送られるケースが増えている。

1970年代からフランス農業の季節労働を担ってきたモロッコやチュニジアなどのマグレブ諸国の人は、最近でも、フランスの外国人農業季節労働者の10%を占めている。昔からフランスの農場とモロッコなどの労働者が強い絆で結ばれていて、数十年同じ人が毎年来たり、その家族が来たり、また、長年の付き合いから村同士でつながりができて、同じ村の人が入れ替わりやってくるという例もあるようだ。しかし、彼らがいつ頃フランスに入国できるのか見通しはまだ立っていない。

今回のコロナ禍の経験を通して、フランスの果樹産業は地域の人に頼るわけにはいかなくて、外国の優れた季節労働者が必要なことが明白になった。非農業部門で大量の失業者が生じると騒がれているが、フランスの農業経営者はもっと多くの外国の季節農業労働者が来ることを待ちわびている。

タイ：コロナウイルスの影響による輸入果実の高騰と販売戦略

タイ現地情報調査員 坂下 鮎美

海外産果実の輸入・販売大手の Cititex グループ傘下の City Fresh Fruits 社のシティサク・チャトローム ウォン氏がコロナ危機の影響について次のように述べた。

今年3月頃からタイを含む世界中で流行しているコロナの影響で多くの国でロックダウン措置がとられ、航空機の運航が停止したり、貨物機のための運航になった。そのため、果実輸入業者は船便を利用して輸入するなどしているが、海外産果実の輸入・販売市場にも少なからず影響が出ている。

ニュージーランドやオーストラリア産の果実は、航空便が全て停止してしまったために、輸入ができず、同国産のサクランボやキウイフルーツなど一部の果実はスーパーマーケットの陳列棚から消えてしまった。米国に関しては航空便は通常通り運航しているが、輸送費が高騰しているという問題に直面している。

ペルー産のアボカドは現在、その輸送費が通常の2倍となり、1箱(5~6kg)が1,500バーツで販売されていたものが、現在では2,000バーツにまで上昇している。

シティサク氏によると実際のところ、果実の輸入業については、一部の国からの輸入が停止しているのみで、メインの販売経路であるスーパーマーケットは営業しているため、販売額から見ると、コロナによる影

響は受けていない。唯一影響を受けているのは、近隣国の国境が閉鎖されているため、輸入した果実を近隣国に輸送できないという点であるという。

同社の直近3か月の販売額は、タイ政府がロックダウン解除のステップ2でデパートがオープンし始めた4月に低迷したがそれ以外は特に目立った影響を受けていない。当初、今年度の販売額は20%増の18億バーツを目標に設定していたが、コロナの影響を考慮し15億バーツに減額した。

シティサク氏は、今後の同社の課題として、輸入する果実の種類を増やすことに重点を置き、定期的に試食会など果実のブランドを形成する活動を実施していくとのことである。現在同社が主に取り扱っている輸入果実は、ペルー、米国、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、ベトナム、インドなど10か国のリンゴ、ブドウ、ナシ、キウイフルーツ、イチゴ、アボカドである。

また、販売経路の課題についても、現在メインとなっている Tesco や The Mall, Foodland など大型スーパー等での販売促進のほか、今後も伸長が期待される卸売りやオンラインでの BtoB(企業間取引)を拡大していくこととしている。

(2020年6月6日付け「プラチャーチャートウラキット」紙より)

1バーツ=約3.5円

トピックス

1. 台湾、イタリア産リンゴの輸入解禁

Asiafruit 電子版(2020年6月1日)

タイ、ベトナムに次いで、台湾がイタリア産リンゴの市場を開放した。イタリアのリンゴ輸出業者は、新しいアジア市場として台湾での来シーズンのリンゴ販売に弾みをつけようとしている。

台湾は人口2,400万人であり、イタリアの生産者、流通業者にとって大変有望な販売先になる可能性がある。

「我々は、近年、新たな輸出市場が加わることを大変うれしく思う」(イタリアリンゴ輸出協会の Montanaro 氏)。「ここでも連携が大いに役立った。台北の同協会事務局の協力が重要だった。できるだけ早期に輸出したい」

台湾は先週、イタリア産リンゴの輸入を始めて許可した。それにより新規市場の対象地域となった。イタリア農務省広報官は、5月22日台湾当局との覚書に合意後、いまこそ台湾の人々は、イタリア産のリンゴを味わうことができると述べた。

タイ、ベトナムに続くイタリア産リンゴの輸出に関するブレイクスルーは、台湾当局とイタリア当局との最初の会合から4年後のことだ。「これはリンゴ生産者にとってすばらしいニュースだ。コロナウイルスによる緊

急事態により、ここ数ヶ月の間に厳しい影響を受けた企業にとっては単なる勇気づけにとどまらない」(イタリア農業大臣の Bellanova 氏)

農業大臣は加えて、サプライチェーンと関係企業に、必要とする支援と回復策を提供するとの約束と決意を表明した。

交渉段階が終わり、相互の植物検疫の段階に入り、台湾へリンゴを輸出する企業リストの点検承認作業を行っている。そのリストが提出されれば、最初の輸出が、2020/21シーズン始めに始まることが期待される。

Mike Knowles 2020,6/1

2. フロリダ州、フィンガーライムの可能性

Asiafruit 電子版(2020年5月14日)

フロリダ大学食品農業科学研究所(UF/IFAS)の研究者は、フィンガーライムが次の流行食品になるのではと信じている。UF/IFAS カンキツ研究教育センターの Dutt 氏は、すでにフィンガーライムの栽培や販売に関する研究資金を獲得している。

フィンガーライムは、楕円形で指のような形をしたカンキツで、長さは約10cm、果肉は、赤、ピンク、黄で、酸っぱい味がする。寿司、野菜、サラダ、パスタを彩る珍味として使われ、主要産地はオーストラリア、カリフォル

(公財) 中央果実協会**編集・発行所**

公益財団法人 中央果実協会

〒107-0052

東京都港区赤坂 1-9-13

三会堂ビル 2階

電話 (03)3586-1381

FAX (03)5570-1852

編集・発行人

今井 良伸

印刷・製本

(有)曙光印刷



本誌について、ご質問、お気づきの点、ご意見がおりになる場合や、転載を希望される場合には、上記にご一報下さるようお願いいたします。より一層有益な情報発信に努めて参ります。

本誌の翻訳責任は、(公財)中央果実協会にあり、翻訳の正確さに関して、

Good Fruit Grower**Produce report****Asiafruit****Freshplaza**

は一切の責任を負いません。

ニア、ハワイだ。

Dutt氏は、フロリダの気候、土壌、農業関係の専門知識が、新しい事業の開発に最適だと信じている。「さらに、フィンガーライムはカンキツグリーン病に対する耐性があり肥料や農薬が他のカンキツより少なくすむ可能性がある」(Dutt氏)。

計画では、州内のUF/IFAS等の園地で地域適応性試験を行うとともに、研究者による栽培法の評価試験を行う。また、UF/IFASのカンキツ育種担当者によるグリーン病の耐性評価とゲノム解析を行う。これらは、現在進められているグリーン病の抵抗性育種にも、有益な情報となるかもしれない。

さらに、フロリダにおけるフィンガーライムの市場機会についても調査する。官能試験では、消費者によるフィンガーライムの味や風味の評価、食料品店での陳列棚での見栄え等の評価を行う。

Dutt氏は、フィンガーライムの試験を2012年から始め、2017年には試験栽培の予算を獲得した。その試験栽培は、カンキツ生産者の関心を集めた。

「フロリダの生産者は、新しいカンキツを利用できるかもしれないことにワクワクしている」(Brite Leaf Citrus NurseryのJameson氏)

「我々は、市場が順調に拡大すると想定しているし、実際にここ数年需要が拡大している。UF/IFASの育種計画では、現在の品種より優れるものもいくつか見つかっている」(Dutt氏)

Carl Collen 2020,5/14

3. ロックダウンで子供の果物、野菜摂取量減少

Freshplaza(2020年6月9日)

イギリスのノースウンブリア大学健康生活研究室の調査によると、給食の無料クーポンを受け取っていた子供のうち、約半数は3月のコロナウイルスによる学校閉鎖以降、果物と野菜の摂取量が大幅に減少したことが明らかになった。

ロックダウン直後の3日間で、約半数の生徒が、新鮮野菜や果物を全く食べてなく、多くの生徒が甘味

飲料やスナックの消費が大幅に増加した。

調査結果は6月8日に公表され、この1週間前には多くの学校が、学年を選んで再開された。その数日前にはウェールズ政府が、6月末に学校を再開することを発表した。

ノースウンブリア大学の健康生活研究室は、イギリスにおける子供への食事提供や給食がない休日の栄養不良についての中心的な研究センターの一つだ。

4. 世界の食市場に対するコロナウイルスの影響

Asiafruit 電子版(2020年6月10日)

前例のないコロナウイルスの影響により、2020年の世界の食市場は、予想より2.03兆ドル増えて9.4兆ドルに達する見込みであることがGlobalData社より発表された。

GlobalData社のBrereton氏によると、コロナウイルスは世界中の消費者の購買を、量の面でも、購入ルートの面でも変化させているという。「外食を控え家で料理をする傾向が進み、それがスーパーの販売増につながっている。世界の消費者の43.3%は家で料理をする機会が増えている」

Brereton氏は、さらに加えて「コロナウイルスの影響で、28.9%の消費者は、オンラインでの食品購入が増えている。このことは、オンライン購入の少なかった、中国やインドのような国で、特に大きな影響を与えることになるだろう」と述べた。

「イギリスでは、オンラインでの食品販売が、今年25.5%増加する見込みで、従前の予測の10.2%を大きく上回り、2009年以来、過去に例を見ない増加率となりそうだ」

Brereton氏によると問題は、全食品産業を通じて、こうした購買行動が長期的に見て、どのぐらい続くかだ。「購買行動の変化による支出増は、レストラン等外食産業がどれだけ早く再開できるかにより影響される。我々は、多くの国で、外食産業への需要は、ほぼ2020年を通して低調であり、それだけ食料品店の販売が増え続けると見ている」

Carl Collen 2020,6/10